

懸魚（破風板装飾）

懸魚とは、屋根の破風の外側にある棧瓦を飾る木製の装飾具である。破風板は屋根の梁が露出している部分を覆うという実用的な役割があるが、懸魚は純粋に装飾的な役割を担っているものである。

元々魚の形をしていたことから「懸魚」と呼ばれるようになったと思われる。近くに展示されている魚型の鯢瓦のように、火災から建物を守るためのお守りとしての意味合いもあったのかもしれない。しかし、その後、猪の目（ハート型）、貝、カブ、クローバーなど、さまざまな形の懸魚が生まれ、現在に至っている。

大天守、乾天守、辰巳附櫓の三角形の破風のいずれにも懸魚が描かれている。ここに展示されているのは、辰巳附櫓から取り外されたものである。カブ型のデザインは、江戸時代（1603–1867）に最も流行したものの一つである。

この装飾は檜でできている。元々は麻紐で覆われており、白漆喰を塗るための固定具として使用されていた。この麻紐を固定するための小さな釘が残っている。中央の六角形の金具（六曜）には黒漆が塗られていたが、現在は剥がれ落ち、木部の汚れも見える。